

〈2〉仕事と生活のバランスについて

結果のポイント

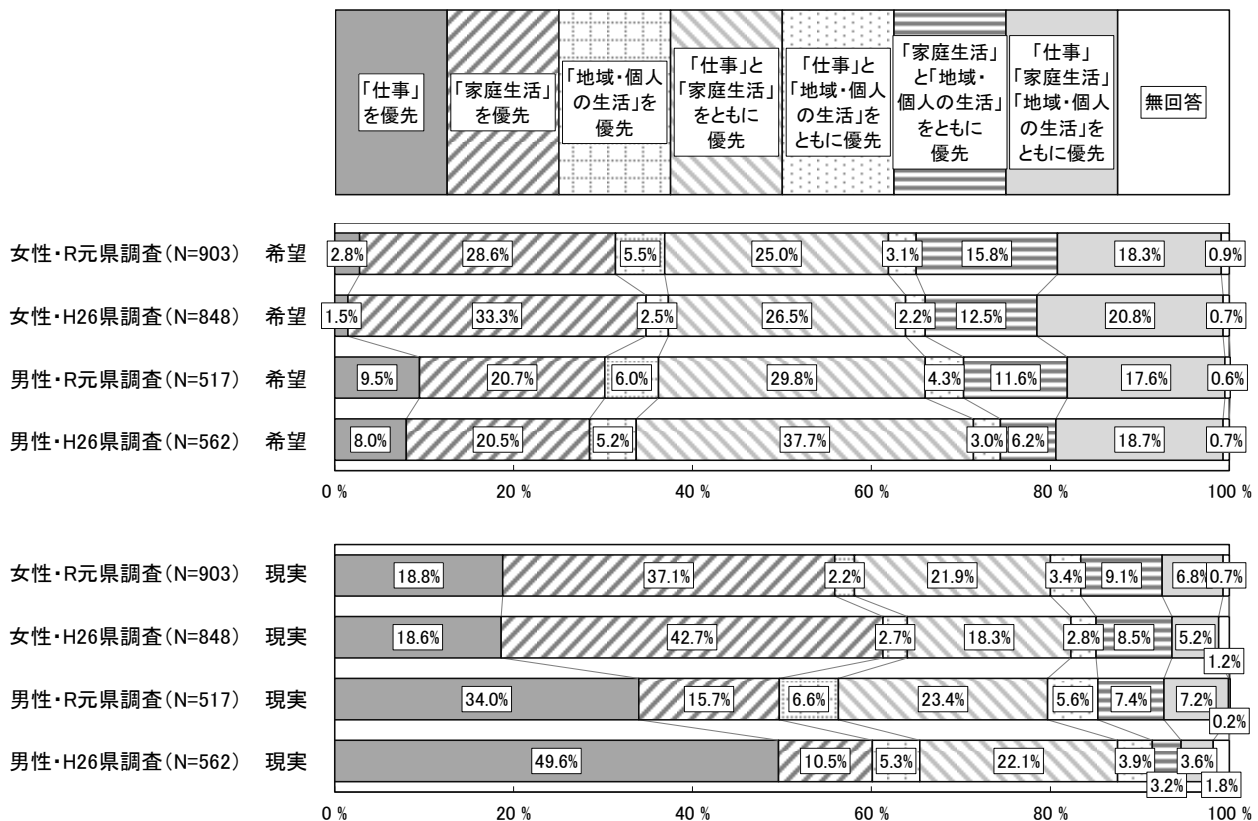
- 男性は「仕事」、女性は「家庭生活」を優先しているが、「仕事」を優先している男性の割合は前回調査より約15ポイント減少
- 「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」を3つとも優先したいと思っているのは、男女別・就労形態別すべての中で、女性の正規職員の割合が一番高く約3割。また、その割合は全国よりも20ポイント以上高い。しかし現状をみると優先できているのは1割以下
- 「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」のいずれの満足度についても、男女別・就労形態別すべてにおいて全国よりも高い (P10～12)

①「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度

生活の中における「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度について、希望を男女別にみると、女性は「家庭生活」を優先（28.6%）、「仕事」と「家庭生活」をともに優先（25.0%）、男性は「仕事」と「家庭生活」をともに優先（29.8%）「家庭生活」を優先（20.7%）となり、順位は異なるものの男女が希望する上位項目は共通している。

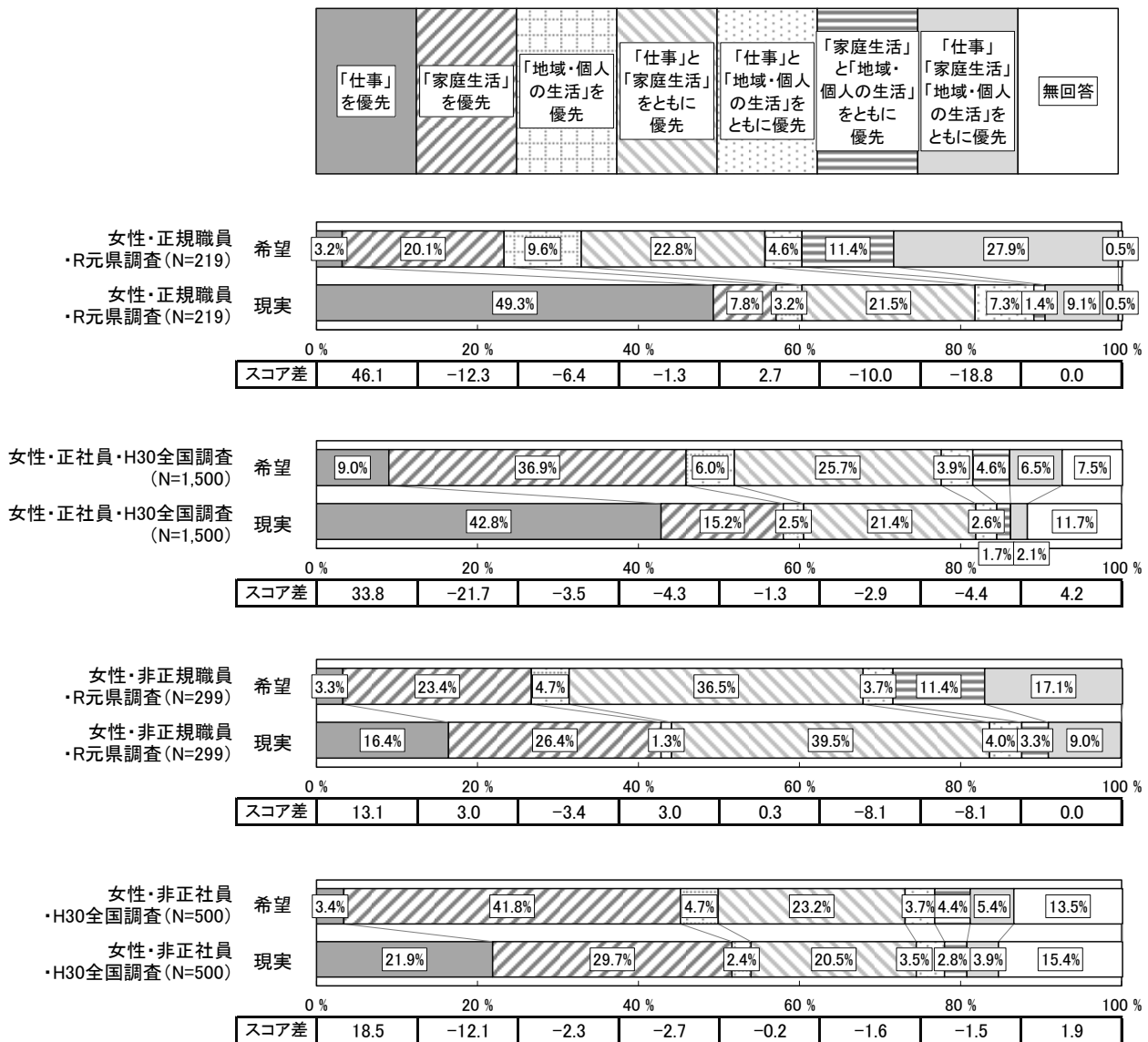
現実を男女別にみると、男性は、「仕事」を優先している人の割合が最も高く（34.0%）、女性は「家庭生活」を優先している人の割合が最も高い（37.1%）。ただし、前回調査と比べると、「仕事」を優先している男性の割合は15.6ポイント減少（前回：49.6%）し、「家庭生活」を優先している女性の割合も5.6ポイント減少（前回：42.7%）した。

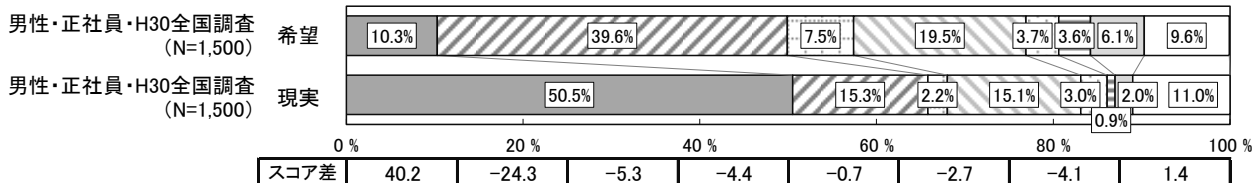
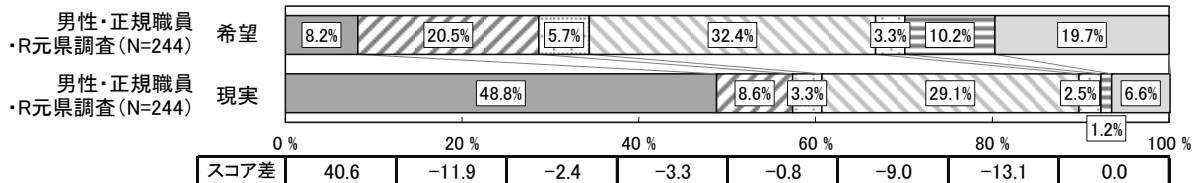
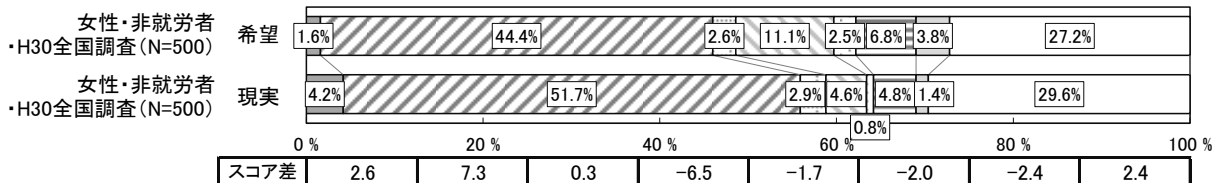
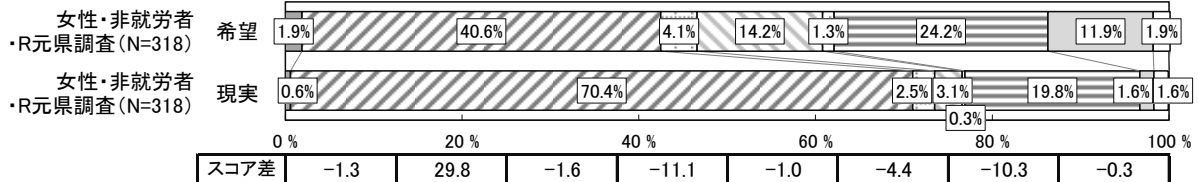
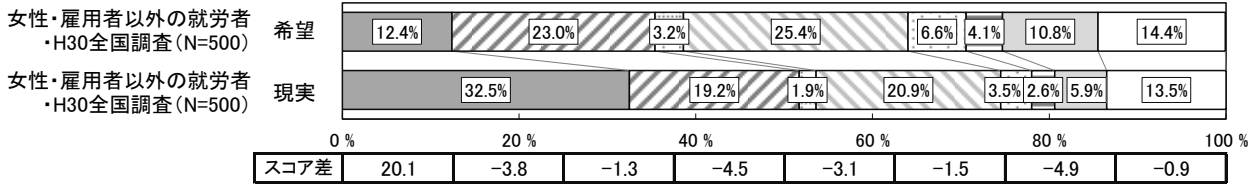
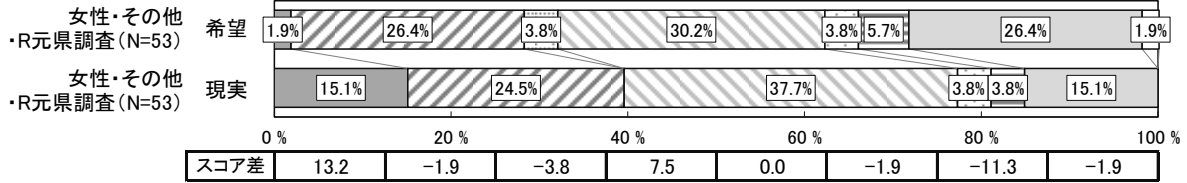
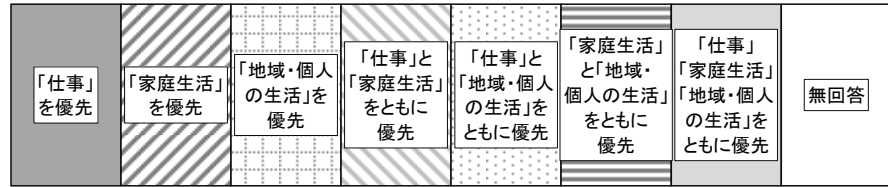
図表 「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度

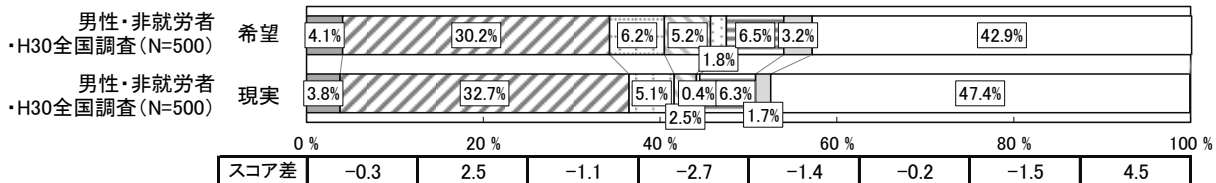
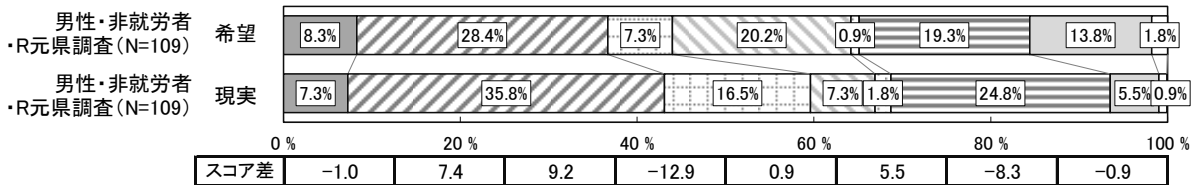
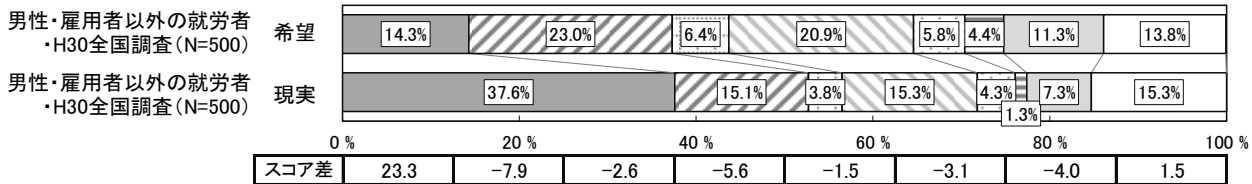
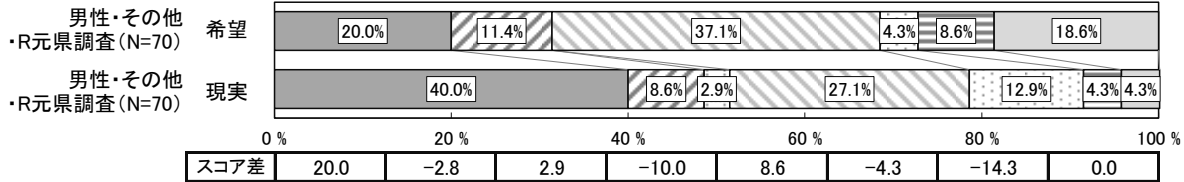
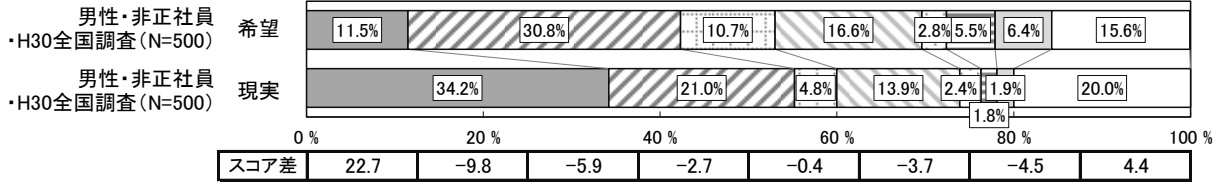
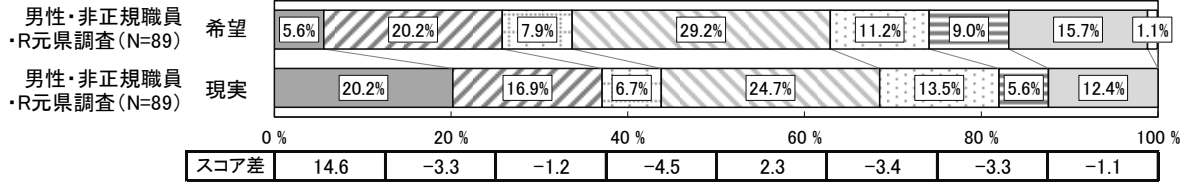
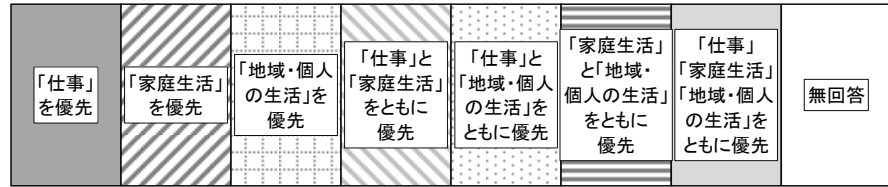


男女別・就労形態別に「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」をともに優先、を希望する人の割合をみると、女性の正規職員が最も高く（27.9%）、全国と比べて21.4ポイント高い（全国6.5%）。しかし、現実でこの3つをともに優先できている人の割合は9.1%となっている。

図表 「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度（スコア差：現実－希望）







◆有識者が読み解く奈良県のデータ◆ 「女性のワーク・ライフ・バランスの課題」
立命館大学産業社会学部 筒井 淳也教授

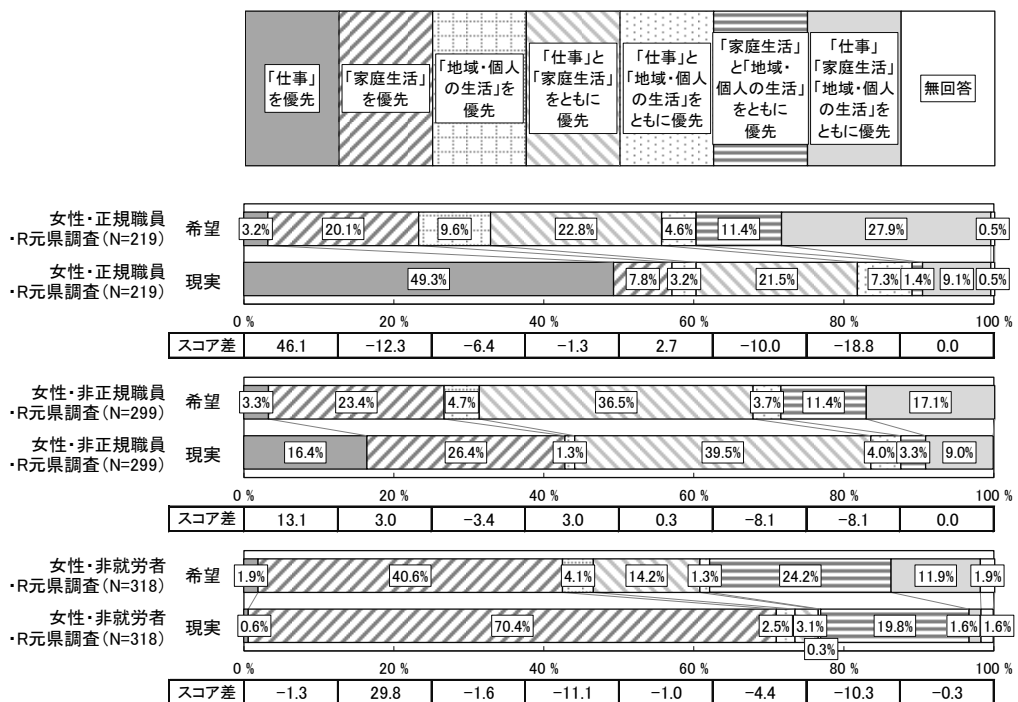
「ワーク・ライフ・バランス」という言葉が日本に普及して10年以上経過しているが、その本来の意味については理解されていないところがある。社会学において、金銭的報酬を伴う労働を有償労働、伴わない労働を無償労働と呼ぶが、家事や育児は基本的には無償労働に含まれている。つまり、労働（ワーク）なのである。では「ライフ」には何が入るかと言えば、自分で自由に選択して自由に過ごすことのできる時間を指している。趣味・娯楽が典型的であろうが、自発的に家族と過ごす時間も「ライフ」に組み入れることができる。

今回の調査では、ワーク・ライフ・バランスの優先度について「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の3つに分けて尋ねており、「家庭生活」の注釈として家事、育児とともに「家族と過ごすこと」という文言があるように、上記の社会学上の「ワーク」と「ライフ」の区別とは一致しないが、それでもワーク・ライフ・バランスについての貴重なデータである。

ここでは女性についての調査結果に注目してみよう（下図表）。就労形態に応じて、希望と現実の差のあり方がずいぶん異なることがわかる。概して、正規職員の女性については「仕事」と「家庭生活」を優先したいのに、現実には「仕事」優先に偏っている。非就労の女性においては、「家庭生活」の項目で、希望より現実で優先順位が高くなっている。非正規職員においては、これら2つに比べて比較的希望と現実のズレが目立たない。

要するに、正規職員として働いていても、専業主婦であっても、ワーク・ライフ・バランスがうまく実現できていないのである。正規職員は有償労働（金銭的報酬を伴う労働）の重みを減らしたいと考えているし、専業主婦は無償労働（家事や育児を含めた金銭的報酬を伴わない労働）の重みを減らしたいと考えている。有償労働も無償労働も同様に負担の重い仕事である。これらが「両立」できているだけでは不十分である。これら両方の負担を軽くして、自由な個人活動や自発的な地域活動の余地をいかに増やしていくのが、ワーク・ライフ・バランスの重要な課題となるだろう。

図表 「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度（女性）（スコア差：現実－希望）



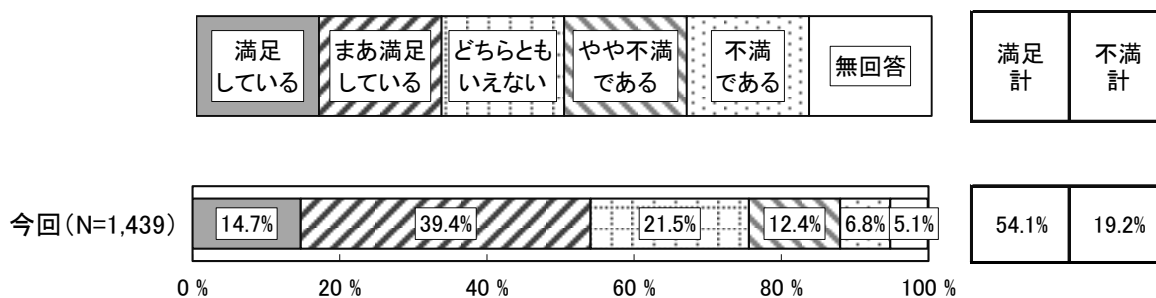
② 「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の満足度

② - 1 「仕事」の満足度

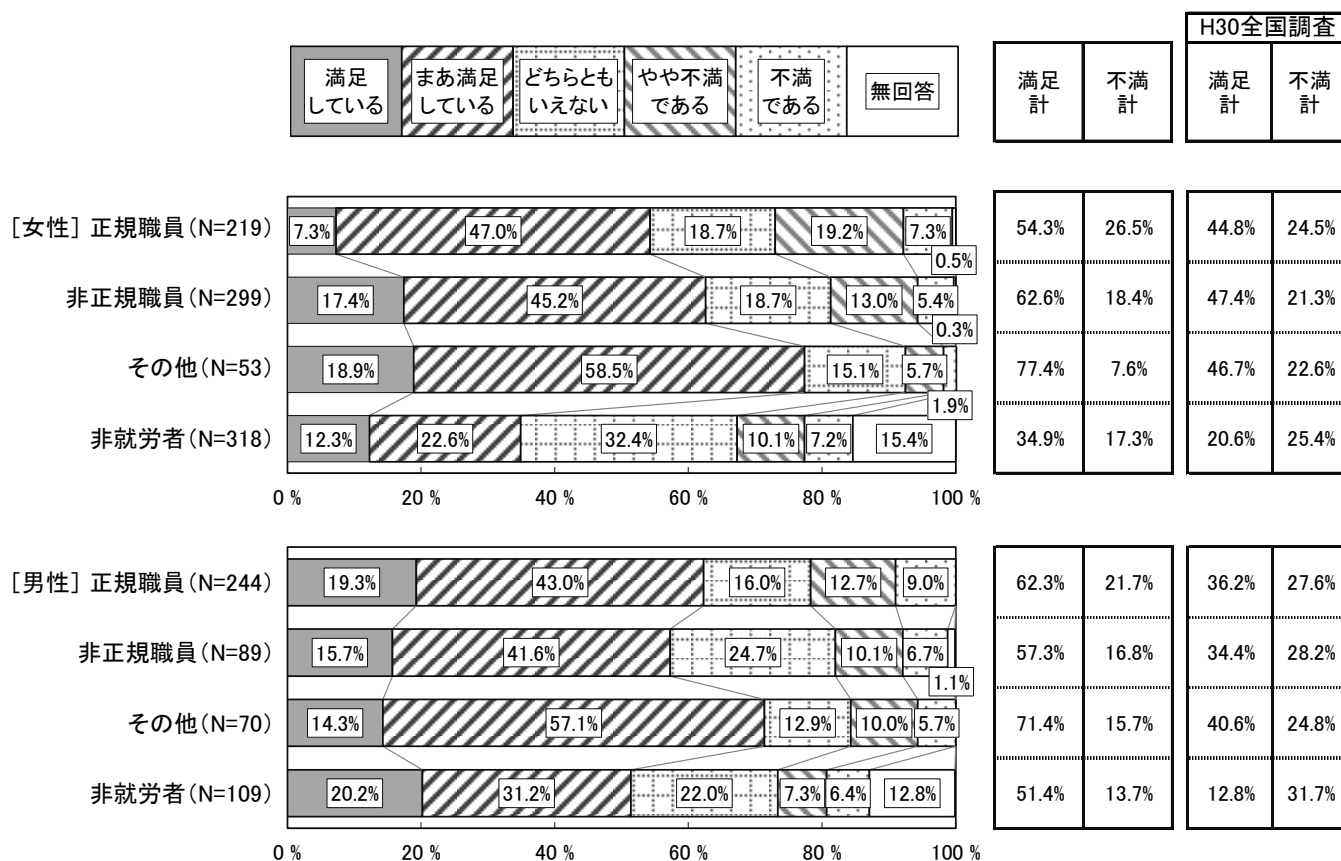
男女別・就労形態別に満足度をみると、女性の正規職員の仕事に満足している人の割合（「満足している」と「まあ満足している」の計）は54.3%で、男性の正規職員（62.3%）に比べて8.0ポイント、女性の非正規職員（62.6%）に比べて8.3ポイント低くなっている。

また、男女・就労形態を問わず、「仕事」に満足している人の割合は全国と比べて高くなっている。

図表 「仕事」の満足度



図表 「仕事」の満足度（男女別・就労形態別）



※ 満足計：「満足している」と「まあ満足している」の合計
 不満計：「不満である」と「やや不満である」の合計

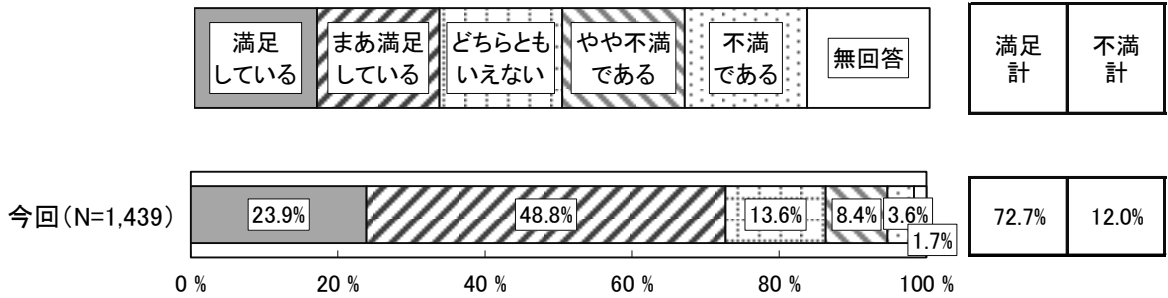
※H30 全国調査：女性・正社員 (N=1,500) 女性・非正社員 (N=500) 女性・雇業者以外の就労者 (N=500) 女性・非就労者 (N=500)
 男性・正社員 (N=1,500) 男性・非正社員 (N=500) 男性・雇業者以外の就労者 (N=500) 男性・非就労者 (N=500)

② - 2 「家庭生活」の満足度

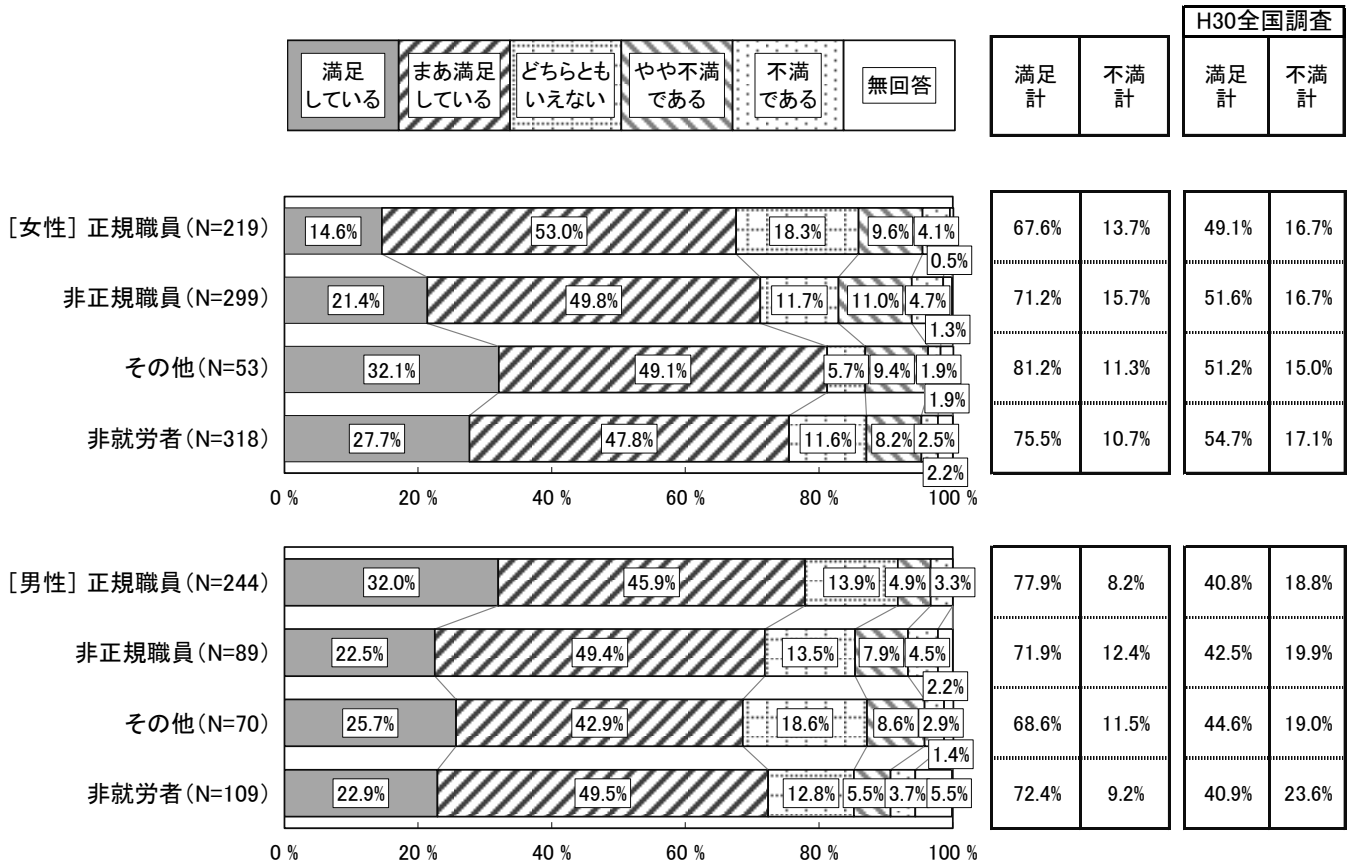
男女別・就労形態別に満足度をみると、女性の正規職員の「家庭生活」に満足している人の割合（「満足している」と「まあ満足している」の計）は67.6%で、男性の正規職員（77.9%）に比べて10.3ポイント低くなっている。

また、男女・就労形態を問わず、「家庭生活」に満足している人の割合は全国と比べて高くなっている。

図表 「家庭生活」の満足度



図表 「家庭生活」の満足度（男女別・就労形態別）



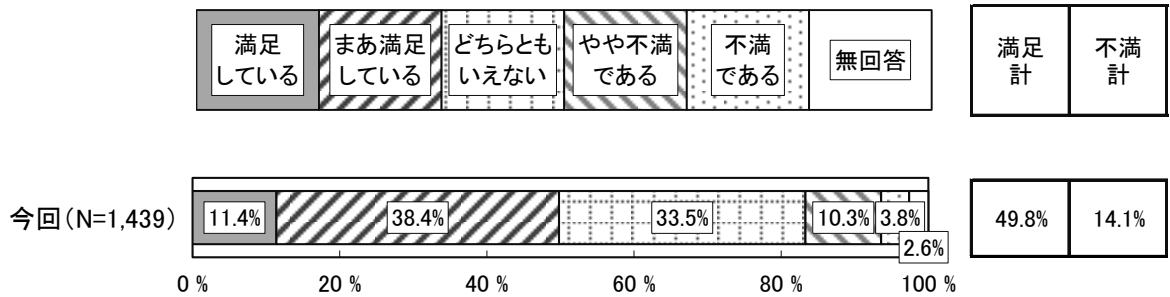
※ 満足計：「満足している」と「まあ満足している」の合計
 不満計：「不満である」と「やや不満である」の合計

※H30 全国調査：女性・正社員 (N=1,500) 女性・非正社員 (N=500) 女性・雇員以外の就労者 (N=500) 女性・非就労者 (N=500)
 男性・正社員 (N=1,500) 男性・非正社員 (N=500) 男性・雇員以外の就労者 (N=500) 男性・非就労者 (N=500)

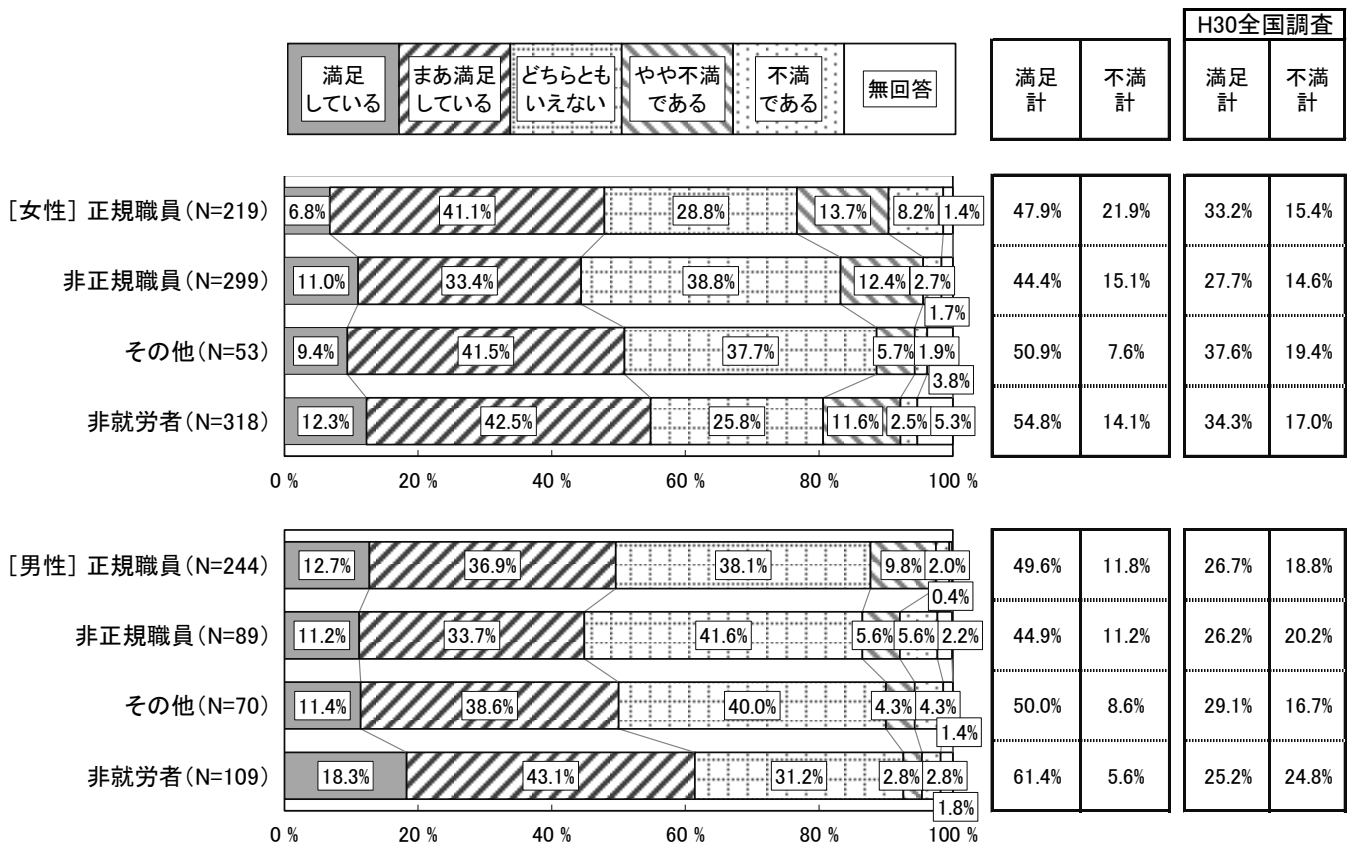
② - 3 「地域・個人の生活」の満足度

男女別・就労形態別に満足度をみると、女性の非就労者の地域・個人の生活に満足している人の割合（「満足している」と「まあ満足している」の計）は54.8%で、男性の非就労者に比べて6.6ポイント低くなっている。男女ともに正規職員、非正規職員は地域・個人の生活に満足している人の割合に大きな差はみられない。また、男女・就労形態を問わず、地域・個人の生活に満足している人の割合は全国と比べて高くなっている。

図表 「地域・個人の生活」の満足度



図表 「地域・個人の生活」の満足度（男女別・就労形態別）



※ 満足計：「満足している」と「まあ満足している」の合計
 不満計：「不満である」と「やや不満である」の合計

※H30 全国調査：女性・正社員 (N=1,500) 女性・非正社員 (N=500) 女性・雇業者以外の就労者 (N=500) 女性・非就労者 (N=500)
 男性・正社員 (N=1,500) 男性・非正社員 (N=500) 男性・雇業者以外の就労者 (N=500) 男性・非就労者 (N=500)